
愛は暖かい、恋は切ない

銀翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛は暖かい、恋は切ない

【Nコード】

N1190B

【作者名】

銀翠

【あらすじ】

「好きなのに別れなきゃならない、好きだから別れなきゃならない」という歌詞について、考える中3の明と彼女の亜季好きあつてる二人だからこそ…

僕は今、友達から勧められたCDを聞いている。特に、二番のサビの歌詞がいいとのことなので、期待しながら聞いてみたが、僕にはいまいち理解できなかった。

「好きなのに別れなきゃならない、好きだから別れなきゃならない」好きななら別れなければいいのにと僕は思う。それを友達に言ったら「お前はまだガキだからな」と言われた。何を言つか、自分だって同い年のクセに…。

それに、僕には奴と違って、彼女がいる。彼女の名前は亜季^{あき}、同級生で同じクラスの子だ。かわいくて性格も良い、正直僕なんかじゃ釣り合わないような女の子だ。

僕は亜季に聞いてみた。「好きなのに別れなきゃならないって、どうして分かる？」亜季は少し考えてから答える。「別れなきゃいけない理由が、あるからじゃないの？」「いやいや、その理由が知りたいんだって」亜季は結構天然入ってるので、こんな会話はよくある。「うん…」今度は結構考えている。「無理して答えなくても良いよ」「うん…」でもどうしたの？いきなりそんなこと聞いて「実は…」僕は歌のことを話した。「まあそういうわけでさ」「なるほどね」「好きなら、別れなきゃいいのについて思わない？」「うん…」確かにそうだよね」「だよな」僕は頷きあった。「僕はさ…」といってから少し後悔した、続きを言おうとしてから、恥ずかしさに気づいたからだ。「なに？」引っ込みがつかないので、僕は続ける。「僕は亜季が好きだから、別れたりしたくないよ。ずっと側にいたい」言ってる最中に、顔が赤くなった。それを聞いた亜季も赤くなった。「うん…」私も明^{あき}とずっと一緒にいたい」僕は赤くなって笑いあった。僕らは幸せだった。

それから、僕らは高校受験などで忙しくなり、二人でいる機会が少なくなつた。でも、少なくなつたおかげで、二人つきりできるとき

は、どんなときよりも幸せだった。亜季のおかげで、辛いことも頑張れた。

受験も終わり、僕らは会えなかった期間を埋めるように二人でいた。だけど、亜季は高校に受かったけど、僕は落ちてしまっていた。「大丈夫だよ！」と亜季が必死で励ましてくれた。

元々高校よりも、働きたいとは思ってたし、何より僕が受けた高校は、亜季とは違う高校だったから、亜季に会えれば別に何でもいいと思ってた。亜季は高校生、僕は少し早い社会人として、春を迎えた。

正直、外で働くのは大変だった。中卒だと、力仕事や体力仕事の仕事しかなかったので、かなり大変だった。そんな僕を支えていたのは亜季だった。仕事が終わる次第、僕は亜季の家に会いに行った。亜季の両親は、僕を亜季の彼氏として認めてくれているのか。訪問を快く迎えてくれた。

さすがに、毎日朝早くから働いて、終わってから亜季の家に行くのには疲れ始めていた。確かに、亜季といえるのは楽しいし、癒されるし、やる気も出る。だけど、体はそうも言ってくれなかった。

二ヶ月程働いてから、僕は過労で倒れた。五日間程入院をするはめになってしまった。仕事場のほうは理解してくれて、一応辞めずにするんだ。迷惑をかけた両親や仕事場の人に、申し訳ないと思ったけど、学校が終わってからすぐに亜季がお見舞いに来てくれるので、幸せだった。

でも僕は思ったんだ、僕は亜季の時間を奪ってるんじゃないかって… 亜季はいつでも優しいし、僕を気遣ってくれる。でも、本当は友達と遊んだり、部活をしたいんじゃないかって思うんだ。毎日毎日、亜季はどんな気持ちで僕と会っているのだろうと考えると、少し怖くなった。だから聞いてみたんだ、入院してから四日目だったかな。「亜季はさ、毎日僕といて楽しい？部活とかやらないの？」「んー… やりたいことはあるけど、明といるほうが楽しいし」亜季は笑いながら言う。亜季は優しい、それに… 嘘が下手なんだ。多分、もっ

と色々したいんだと思う。だけど、僕はもう少し亜季に甘えていたかった。

退院してからも、僕は仕事が終わった後、亜季の家に行っていた。

あと、少しだけ…。

仕事してから三ヶ月、僕は亜季に言ったんだ。「別れようか」亜季は驚いた顔をした。「なんで!？」正直に言ったら、優しい彼女のことだ。きつと、平気だよ、なんて言うんだろうな…。「亜季といるの疲れたんだ」うまく言ってるか分からなかった。「そんなの…勝手だよ…」亜季は泣いている。僕は抱きしめたかった。だけど、このまま亜季を縛っているのはダメなんだ。僕は馬鹿だから、距離を置くんてことを考えなかった。ただ、彼女を自由にしたかっただけなんだ。

結局、僕らは別れた。これは自信を持って言えるが、亜季は僕を好きだった、僕も亜季が好きだった。だけど、好きっていうのは愛じゃないし、付き合うつてことは結婚じゃない。

「好きなのに別れなきゃならない、好きだから別れなきゃならない…か」亜季は元気でやってるだろうか、僕はどうにか元気でやっていける。

（後書き）

楽しいのもいいけど、切なくて悲しくて、寂しいからこそ感じるものがあると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1190b/>

愛は暖かい、恋は切ない

2010年12月12日02時44分発行